

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	1
1. 国際教養学部	3
2. 文学部、人文科学研究院	5
3. 法政経学部、社会科学研究院	8
4. 教育学部、教育学研究科	10
5. 理学部、理学研究院	13
6. 工学部、工学研究院	16
7. 園芸学部、園芸学研究科	19
8. 医学部、医学研究院	21
9. 薬学部、薬学研究院	23
10. 看護学部、看護学研究科	25
11. 環境リモートセンシング研究センター	28
12. 真菌医学研究センター	31

注) 現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況		研究成果の状況	
	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
国際教養学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
文学部、人文科学研究 院	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
法政経学部、社会科学 研究院	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
教育学部、教育学研究 科	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
理学部、理学研究院	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
工学部、工学研究院	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
園芸学部、園芸学研究 科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
医学部、医学研究院	【2】	相応の質にある	【3】	高い質にある
薬学部、薬学研究院	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
看護学部、看護学研究 科	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
環境リモートセンシン グ研究センター	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
真菌医学研究センター	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある

1. 国際教養学部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 4)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 4)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 国際学術誌に掲載された論文が複数あり、中でも Nature Communications への論文掲載は高 IF 誌への掲載として特筆される。また、学術的評価としては日本熱帯農業学会平成 30 年度論文賞、日本色彩学会論文賞の受賞が特記される。
- 国際共同研究の一環として、American Orthopaedic Foot and Ankle Society の travelling fellow を受賞した。

〔特色ある点〕

- 地域課題解決に関連して、千葉県内の自治体（南房総市、長柄町、芝山町、横芝光町、木更津市）の委託による地域活性化・調査のための共同研究を推進した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

優れた研究業績を増やしていく必要があるものの、学術的に優れている研究業績、社会・経済・文化的に優れている研究業績があり、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

2. 文学部、人文科学研究院

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 6)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 7)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 学内の文理横断的融合研究の拠点形成としては、学内のグローバルプロミネント研究基幹による独創的な次世代研究の創出と戦略的推進に、千葉大学の次世代の重点推進分野となり得る研究分野を選定する「次世代研究インキュベータ」として、人文科学研究院の教員が主体となって立ち上げたプロジェクト、「多元的認知行動解析に基づく心理特性の解明とその応用」が採択され、国際会議における特別セッションの企画（Asia-Pacific Signal and Information Processing Association Annual Summit and Conference in Hawaii, 2018）、日本時間学会大会の開催（平成 30 年 6 月）、国際会議の主催、研究成果のプレスリリース 3 回（平成 28 年 5 月、平成 29 年 7 月、令和元年 7 月）など多数の業績を挙げている。

〔特色ある点〕

- 人文科学研究院では、平成 18 年から存在する地域研究センターに加え、平成 29 年度より総合人間学研究センター、史資料文献学研究センター、教育・学修支援研究センターの 3 つのセンターを立ち上げ、毎年それらのセンターによって研究と大学院教育を連動させた 10～15 件の研究プロジェクトが推進されている。平成 30 年度には 14 点の報告書が刊行されている。
- 地域研究センターで推進してきたユーラシア研究と環境リモートセンシング研究センターとの研究、史資料文献学研究センターが推進してきた東アジア研究の蓄積が、文部科学省の卓越大学院プログラム（令和元年）における構想「アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」の採択につながった。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

3. 法政経学部、社会科学研究院

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 9)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 9)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

○ 平成 28 年度に「未来型公正社会研究（令和元年度より「学際的社会科学による未来型公正社会研究」に改称）」、平成 30 年度に「小地域推定の統計手法開発と貧困・公衆衛生・災害などへの応用」に係る研究拠点を設置した。

また、平成 29 年 4 月、社会科学研究院構成員を中心メンバーとする全学的研究拠点として「グローバル関係融合研究センター」を設置した。

○ 学外との共同研究の中心拠点として、平成 26 年から令和 2 年の科学技術振興機構／社会技術研究開発センター採択を受けて社会科学研究院に OPoSSuM（Open Project on Stock Sustainability Management）を開設し、令和元年度から令和 3 年度の環境研究総合推進費（環境省）採択により規模を拡大している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、5 件、2 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

4. 教育学部、教育学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 11)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 12)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

次世代才能支援室が中心となり、県内・近隣都県の高校生に対し、科学教育講座の提供、留学生派遣による高校での国際交流授業、国際研究発表会の開催等を行い、第3期中期目標期間に各事業の参加者や参加校を増大させ、地域のグローバル力および科学力の伸長や高大接続の動きを加速させている。また、附属学校との連携研究も拡充している。

〔優れた点〕

- (1) 次世代才能支援室が中心となり県内、近隣都県の高校生に対し、
(a) 科学教育講座の提供、(b) 留学生派遣による高校での国際交流授業、
(c) 国際研究発表会の開催を行った。当室が発足し軌道に乗った平成27年度には(a)科学教育講座の参加者は127名であったところ、第3期中期目標期間に入ってさらに多くなり、平成30年度には174名になった。参加者の高校の数も、平成27年度で26校であったところ、平成30年度は46校に増え、高大連携コンソーシアムとしての連携高校の数も平成27年度での28校から、平成30年度には37校に大きく伸びている。(b)留学生派遣では、平成27年度には高校7校に15回行い、高校生578名へ留学生66名を派遣したが、平成30年度には高校が10校に増えた。派遣回数は15回であったものの、高校生788名へ留学生138名を派遣した。(c)国際研究発表会は平成27年度に3回行い、22校の高校から159名の参加高校生がいたが、平成30年度には3回の実施で39校の高校から282名の高校生が参加するまでになった。

〔特色ある点〕

- 平成29年度に千葉大学アジア・アセアン教育研究センターを立ち上げた。
- 前年度の科学研究費補助金申請が不採択だった40歳未満の教員に学部長裁量経費から研究費を支援した。平成28年度には6名支援して6名とも不採択であったが、令和元年度については前年度支援した3名の科学研究費補助金申請がすべて採択された。
- 教育学部－附属学校連携研究課題は令和元年度に62件ののぼり、平成28年度の46件から大幅に増加して、教育実習関係の研究や附属学校園が求められる課題等に関する研究が大きく拡大した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

5. 理学部、理学研究院

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 14)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 15)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

千葉県内に露出する地層に関する共同研究の成果の一環として「チバニアン」が地質時代の名称として使われることが承認されている。

〔優れた点〕

- 国内 22 機関 35 名の地球科学研究者による千葉県市原市田淵の養老川沿いに露出する地層「千葉セクション」を下部-中部更新統境界の国際基準である国際境界模式層断面とポイント（GSSP）とするための共同研究に理学研究院及び教育学部の教員が参画し、その成果としての学術論文の公表と国際地質科学連合（IUGS）の審査に供するための申請書作成に貢献している。平成 29 年 6 月に審査の第 1 ステップの作業部会に申請書を提出した後、第 2 ステップ、第 3 ステップを通過し最終ステップでの審査で「チバニアン」が地質時代の名称として使われることが承認された。
- ハドロン宇宙国際研究センターでは、南極点深氷河に設置されたニュートリノ天文台「IceCube」による観測により、超高エネルギー宇宙線起源となり得る天体が満たすべき条件をニュートリノ測定によって初めて導出した。さらに宇宙ニュートリノ検出情報を即時に配信することにより、電波から γ 線にいたる幅広い帯域で追尾観測が可能となった。この手法により高エネルギーニュートリノ天体候補を史上初めて同定することに成功した。高エネルギー宇宙線の起源は宇宙物理学・天文学における最重要問題の一つである。本研究成果は、急速に進展する高エネルギーニュートリノ天文学が、宇宙線起源を明らかにしつつあることを明確に示した点で、極めて高い学術的意義を持つものである。特に、ニュートリノ観測を軸に多様な観測手段を統合して宇宙の姿を探る「マルチメッセンジャー天文学」によって、宇宙線起源天体が初めて同定され、米サイエンス誌による平成 30 年の科学 10 大ニュースの一つに選定されている。また、これらの論文は、被引用回数において上位 10%に入っている。
- 独自の理論計算を用いた膜タンパク質の熱安定化変異体予測法を開発（特許第 6359656 号・平成 30 年）し、製薬企業 5 社と創薬標的膜タンパク質の熱安定化と構造解析に関する共同研究を実施している。また、光触媒を利用した高電圧型太陽電池を開発（特許 6213958 号・平成 29 年）し、化学会社と高電圧化の原理に関する共同研究を実施している。

〔特色ある点〕

- 世界レベルでの研究の推進と次世代を担うイノベーションの創出を目指し、融合分野・新領域創出の基礎となるような特徴的な研究を育成するために設置された「グローバルプロミネント研究基幹」が推進しているリーディング研究育成プログラムの一つとして『先導的ソフト分子の活性化と機能創製（略称：ソフト分子活性）』が採択され、「ソフト分子活性化研究センター」が設立された。ソフト分子活性化研究センターの運営は、理学研究院の教員が中心となり、千葉大学の誇る触媒化学、分析化学、マテリアルサイエンスを融合し、新規な機能性ソフト分子の創製を目指す学際的研究を推進しており、英文論文 100 件以上となる多数の業績をあげている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、8 件、5 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

6. 工学部、工学研究院

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況	17)
(分析項目Ⅱ 研究成果の状況	18)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 「熱エネルギー変換グリーンイノベーション技術実証のための拠点整備事業」（経済産業省イノベーション拠点立地推進事業 先端技術実証・評価設備整備等事業）実施を契機とし設置された大学院工学研究院附属次世代モビリティパワースource研究センターは、自動車用パワースource（燃料を含む内燃機関とそのハイブリットシステム）の産学官連携を行うオールジャパンの拠点として機能している。工学研究院教員を研究代表者とし、16 の関連大学をはじめ、関連研究機関、関連企業とコンソーシアムを形成し共同研究を行っている。経済産業省、国土交通省や内閣府などのプロジェクトに多数関わり、国からの信頼度も高いといえる。平成 30 年度までの内閣府戦略的イノベーション創造プロジェクト（SIP）「革新的燃焼技術」では、従来製品で最高 40%程度であった自動車用ガソリンエンジンの最高熱効率を 51.5%まで高めることに成功するなど、環境や資源への低負荷を追及する高い成果を上げている。
- 「分子キラリティー研究センター」では、光のキラリティーを駆使して多彩な物質をナノ・マイクロスケールで自在に操作・制御し、物質の新奇構造・新機能を創造することを目的とし、その結果、エレクトロニクス・化学・創薬における革新的イノベーションの創出を狙う。これまで同センターでは、国内外の研究機関と共同研究ネットワークを構築するとともに、当該分野の世界的な拠点を形成してきた。平成 29 年度に全学センター化することで、さらなる研究拠点として進化を遂げ、センター長をはじめ工学研究院所属物質系教員が一丸となって研究推進している。

〔特色ある点〕

- 平成 28 年度時点では、従前の大学院工学研究科における専攻内でのコースという単位のもと教員組織と教育組織が同一であったが、平成 29 年度の工学系組織の改組に併せて教員組織を別途「大学院工学研究院」として設け、その中で関連する研究キーワードごとに、3つの「領域」およびその中に細分化された11の「サブ領域」という単位でグルーピングを行った。これにより、研究に関しては、真に共通する研究分野や方向性を有する教員同士の協調から質の高い

研究成果を生み出すことが可能となった。

- 工学研究院が得意分野の一つとしているドローンをはじめとした昆虫や鳥のような知能的な「空飛ぶシステム」に関わる最先端な研究の拠点として、大学院工学研究院附属インテリジェント飛行センター（CAIV）を令和元年度に設置した。国内外の研究機関と連携し、共同研究等を実施する。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、10件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

7. 園芸学部、園芸学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 20)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 20)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 平成 26 年度に日本学術会議より「マスタープラン」として採択された学術大型研究計画「高付加価値植物の作出および生産システムの開発」が、その後も継続採択されている。学部・研究科単位で提出されたマスタープランが採択される例は少なく、園芸学研究科が園芸学研究を推進する核として期待されていることを示している。本プランで提唱した内容を基本として各種研究資金への応募努力を続けている。
- 環境健康フィールド科学センターや NPO 法人と連携し、施設園芸全般に関わる研究シーズの発掘と円滑な研究の推進、成果の社会実装を目的とした研究プラットフォーム「日本型施設園芸産業革新化ネットワーク」を形成し、会員と継続的に情報交換と交流を行っている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、3 件、1 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

8. 医学部、医学研究院

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 22)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 22)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、16件、3件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断した。

特に、「乳汁分泌欠損と高プロラクチン血症における変異型プロラクチン受容体」及び「ギランバレー症候群におけるエクリズマブの安全性と有効性：多施設二重盲検ランダム化群間比較第Ⅱ相試験」は、学術的に卓越している研究業績である。

9. 薬学部、薬学研究院

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 24)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 24)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 専任教員に占める女性教員の割合は、過去数年間で少しずつ増加しており、平成 28 年度の 19.0%から、平成 30 年度には 21.8%に増加している。
- 平成 26 年度 10 月に開始された 6 件の千葉大学戦略的重点強化プログラムは、平成 28 年度から設置されたグローバルプロミネント研究基幹の中でさらに重点化された。その中で「ファイトケミカル植物分子科学プロジェクト」は薬学研究院に所属する教員が推進責任者や主要なコアメンバーを務め、次世代研究インキュベータに配置されて、高い被引用度の論文発表やプレスリリース、大型研究費の獲得等において大きな成果を挙げている。このような、優れた実績に基づいて、令和元年 10 月にこのプロジェクトの基盤として学内共同利用教育研究施設である「植物分子科学研究センター」を設立して、国際的な研究拠点を形成し、さらに学際的研究を推進している。この全学的な新研究センターにおいても、薬学研究院に所属する教員が、センターの研究推進や運営に主要な役割を果たしている。
- 令和元年度には民間企業との契約により、連携講座「創薬物性研究室」が開設された。民間企業に属する 2 名が連携教員として研究教育に携わっている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、2 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

10. 看護学部、看護学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 26)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 27)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

研究推進を担う組織改編や経済的支援に取り組み、国際学術誌への掲載論文数、科研費の大型種目採択数や厚生労働省科研費の採択数が増加している。また、看護学における学術的基盤の充実・発展に寄与する独創的研究プロジェクトとして、医療人の専門職連携教育の理論化とその成果の8か国語翻訳、医学・工学等9学問領域による学際プロジェクトに取り組んでいる。

〔優れた点〕

- 第2期中期目標期間において、教員の国際誌への掲載論文数が年間10件未満から20件へと増加した。第3期中期目標期間における国際誌への掲載論文数は、年間25～32件とさらに増加し、International Journal of Nursing Practice, Journal of Nursing Management, Journal of Advanced Nursingなど看護学領域において高いImpact Factorを獲得している国際誌にも掲載されるようになった。また、今まで看護学研究科では特許申請がほとんど見られなかったが、第3期中期目標期間においては、在宅状態見守りシステムについて特許公開がなされた。
- 厚生労働省科学研究費補助金は、第2期中期目標期間から引き続き、毎年500万円以上を獲得している。地方自治体や企業との共同研究は、第2期中期目標期間には1件、783,000円であったが、第3期中期目標期間に入り3件、2,970,000円と大幅に増加し、産官学連携が順調に推進されている。寄付金についても、第3期中期目標期間に入り、受け入れ件数は増加しており平成28～令和元年の4年間で29件と、第2期中期目標期間6年間の26件を既に上回っている。更に大型寄付金が増加しており、第2期中期目標期間は1,000万円以上の寄付金受け入れは平成24年度のみであったが、第3期中期目標期間においては平成28年度と平成29年度に1,000万円以上の寄付金を受け入れた。

〔特色ある点〕

- 平成29年度より看護学研究科の研究推進を担っていた「学術推進企画室」および「学術・国際活動委員会」を、学術推進に係る活動を行う「学術推進企画委員会」と、国際交流の推進等を行う「国際活動委員会」に改編した。学術推進企画委員会では、教員の競争的資金の獲得状況、研究公表状況について常に

最新の情報を把握・分析し、学術推進に向けた戦略を立てている。科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金の採択に向けた FD や、国際ジャーナルへの論文投稿に向けたアカデミック・ライティング技術の向上を図る FD を、毎年、複数回実施するとともに、教員の研究業績を集積・共有する目的で、学術推進メールを発信している。

- 第3期中期目標期間においては、特色ある研究として以下の超高齢社会およびグローバル社会のニーズに対応し、かつ、看護学における学術的基盤の充実・発展に寄与する独創的な研究プロジェクトを、国内外の看護学研究を牽引すべく強力で推進している。

(1) 医療人の専門職連携教育 (IPE) の理論化：日本の医療系基礎教育においてコアカリキュラムに位置付けられており、開発した専門職連携実践能力の概念化及び自己評価尺度は8か国の言語に翻訳され、アジアの IPE 推進にも大きな影響を与えた。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、3件、3件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

11. 環境リモートセンシング研究センター

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 29)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 30)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 世界に先駆けた小型衛星に搭載可能な円偏波マイクロ波合成開口レーダを開発し、小型航空機を用いた実証実験に成功した。本研究は、千葉大学の研究の核となる新規性・独創性を備えた多様で発展性のある研究群を長期間に渡り継続的に創出することを目的とした「グローバルプロミネント研究基幹」で選定した6つの戦略的重点研究強化プログラムのうちの一つである。この研究成果は Institute of Electrical and Electronic Engineers (IEEE) 等の国際誌への論文掲載につながった。
- 平成 19 年度に開始された 4 大学連携事業 (VL: Virtual Laboratory) の枠組みで、世界の静止気象衛星データのアーカイブ、処理及び公開を継続するとともに、平成 27 年からは「ひまわり 8 号」についてもアーカイブ、公開し、利用推進を図っている。ダウンロードファイル数は令和元年度で 1 億 7,300 万ファイルに達しており (対平成 28 年度比約 1 億ファイル増)、研究コミュニティの中核として機能している。

〔特色ある点〕

- 気候・環境研究を推進している 4 つの研究拠点センターが中心となってバーチャルラボラトリー (VL) を形成し、各拠点センターの特色と研究資産を活かした研究と教育を分担・連携して行っている。環境リモートセンシング研究センターは衛星データのアーカイブ・処理・配信や放射計ネットワーク (SKYNET) 等からの放射・大気データの継続的観測とデータ提供を担当し、当該分野にリモートセンシング研究・教育の拠点の立場で貢献している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

12. 真菌医学研究センター

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 32)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 33)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 「無菌動物飼育施設」の運用を開始し、真菌免疫学・真菌マイクロバイオーームという新たな研究領域での共同利用・共同研究の実施を可能にした。本施設を用いることで、特定の腸内細菌が病原性細菌の感染を阻害することを見出した。
- バイオリソース管理室は、文部科学省ナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）『病原真核微生物』の中核拠点として、平成 29 年度から第 4 期中期目標期間の活動を実施しており、病原真菌・放線菌の収集と性状解析と保存、さらに真菌症研究者への分譲を行うことで関連コミュニティにおける研究推進に貢献している。保有菌株数は、23,978 株（平成 28 年）から 24,459 株（平成 30 年）へと着実に増加している。
- 抗真菌薬剤開発において、准教授グループが、病原酵母カンジダ・グラブラータの全ゲノム配列を基に、病原遺伝子に網羅的に変異を導入した変異株ライブラリを作成し、それを利用した抗真菌物質の標的となる遺伝子の網羅的・高感度スクリーニング法を開発し、令和元年度には創薬ベンチャー企業を設立した。
- 真菌研究コミュニティに対する啓発活動として、先端研究成果・技術・菌株情報・真菌の形態学的特徴等の情報を、ウェブサイトを通じて随時提供するとともに、「真菌症診断ガイド」、「真菌症特殊検査」、「輸入真菌症発生状況」等の情報を医療・検査・行政等に対しても広く発信している。
- 全国の医療施設から各種の検査を受け入れるとともにその結果に基づいて診断・治療に関する専門的なアドバイスを行い、我が国における「真菌症リファレンスセンター」として機能している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。